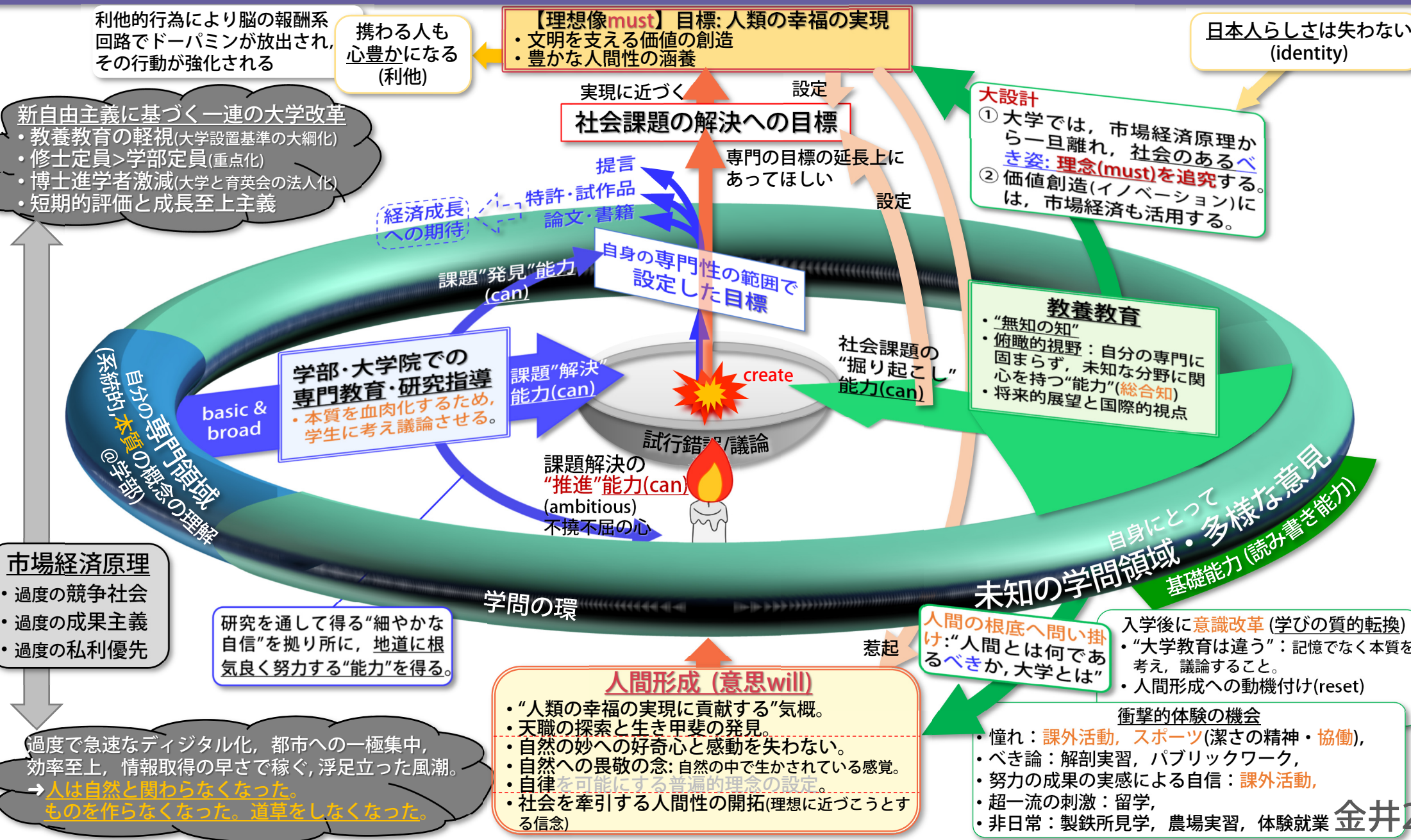


令和CAST「社会にインパクトある研究」第7回討論会  
「社会課題解決の議論への経済学および農学的視座と問題提起」

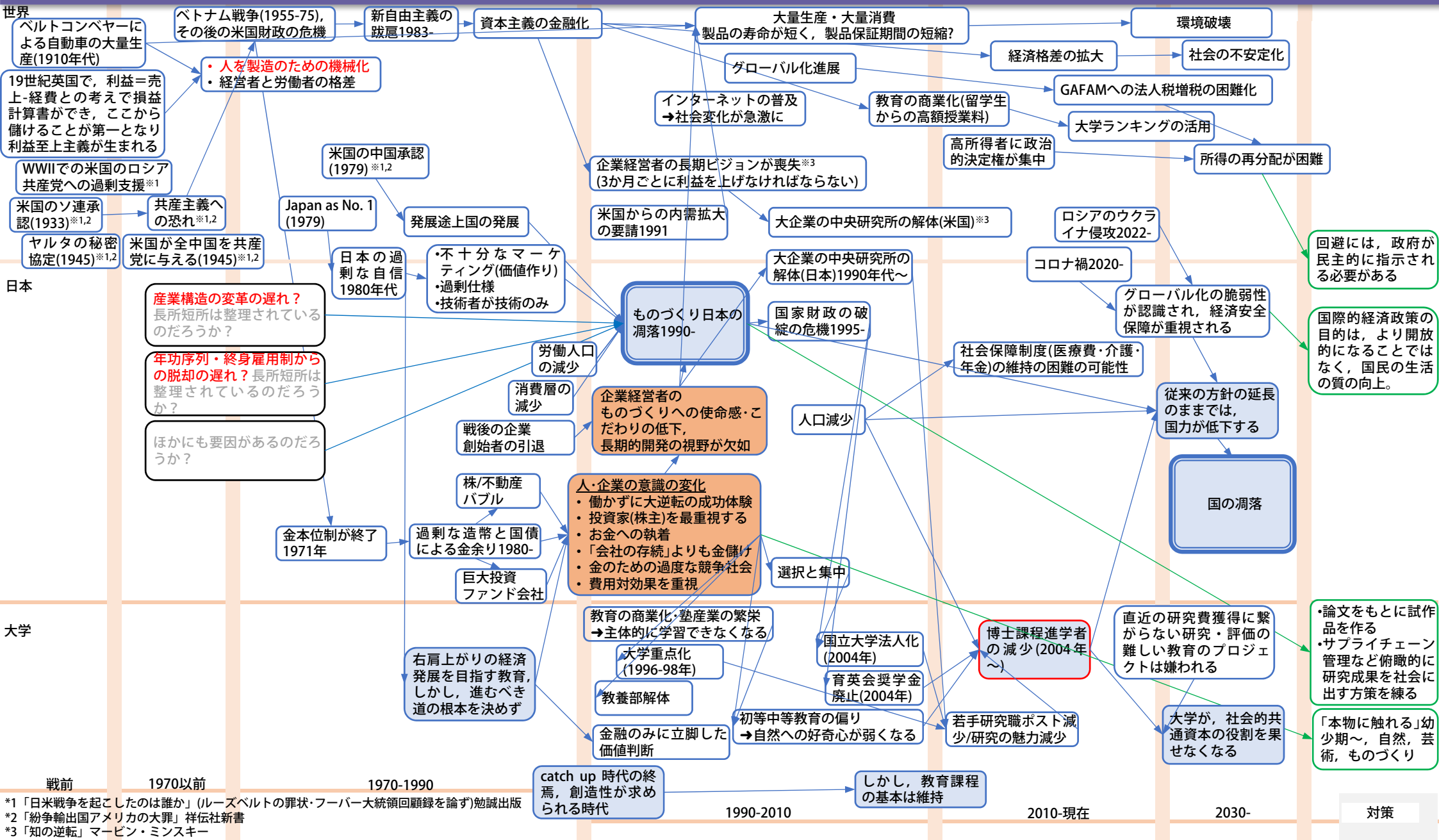
2022年9月29日(木) 13:00-16:00 @WEB

東北大学大学院工学研究科  
先端学術融合工学研究機構(令和CAST)  
社会インパクト推進ユニット

俯瞰図：大学教育を深化させ、自立的に思考する人が増え、“持続可能で心豊かな社会”の実現に近づく  
～大学での専門教育と教養教育の位置づけ～



このままでは国力が低下。教育の質向上・長期的視野の研究が難しい現状で大学はどうするか





## 背景・目的

【**ものづくりの衰退**】日本は終戦後、加工貿易を基軸に奇跡的な経済成長を果たした。しかしキャッチアップを果たした1990年代中期以降、経済成長率は2%前後になり顕著に成長できないばかりか、新興国の発展、不得意なグローバル化・情報革命が次々と起き、原料、燃料、食料の輸入に必要な約30兆円相当の外貨獲得を、従来型技術を生かした加工貿易に依存し続けることが難しくなっている。さらに非民主主義国家陣営の身勝手に攻撃的な政策により、原料、燃料、食料の調達に関わる経済安全保障も注視されるようになっている。

【**環境問題**】日本は少資源で食料自給率も低い一方、内需拡大のため、大量生産・大量消費を奨励し、近年製品の寿命が短くなったことや食品の無駄を見過ごしている。このように資源は無尽蔵にあるかのように買いさえすれば良いという金融至上主義の短期的な考え方は、大きな環境負荷をもたらし、また倫理的問題であると指摘されている。

【**経済成長は手段の一つ**】今世紀になり、日本は国を挙げてイノベーション創出による経済成長をひたすら目指しているが、成長は農地の限られる農村では原理的に難しい一方、都市部ではすでに人々が満足できる程の経済的豊かさが得られている。経済的豊かさは「心豊かな社会」を創るための必要条件の一つであろうが、永遠に経済成長ができない以上、成長の数値達成を目指し、常に追い立てられるのは人々に不安を煽るのではないか。

【**定常経済の大設計**】ひたすら経済成長を目指すよりは、「定常経済」において、①環境のため贅沢を排し、②原料、燃料、食料の調達の収支を合わせる努力(イノベーション創出を含む)の上に、③人類の生きる根幹に関わる創造性を大切にして、人々が心豊かに生きる社会のあり方(理想像)、その長期的実現方策の追究も必要ではないか。

## 話題提供・発表

### 経済学研究科 秋田次郎教授「社会課題解決の議論への経済学的視点と問題提起」

「社会にインパクトある研究」が狙う「社会課題解決」に関わる「経済学」と周辺領域の「視点」からの議論枠組を整理した上で、若干の問題を提起する。効率性と衡平性の概念、財とサービスの概念、市場機構の資源配分機能とその失敗といったベーシックミニマムを巷間しばしば誤解され易い点に結び付けて説明した上で、Web3, Global Value Chain, Sustainabilityといった変貌していく環境下での今後の日本経済の立ち位置について議論する為の叩き台を提供する。

### 農学研究科 伊藤房雄教授「食料消費分析からみる行動変容の難しさとこれからの食農教育のあり方」

食料自給率38%の「飽食」日本では今日、「食」の安全・安心に対する需要の高まりとともに大量の食品ロスが発生している。一方、農業・農村に目を転じると、そこには農業従事者の高齢化や担い手不足、耕作放棄地の増大、等々といった農業生産の課題のみならず、農村の活力は著しく低下し、生活基盤が脆弱化している。それらは農業・農村が有する景観や貯水といった多面的機能を低下させるとともに、再生産に超長期の時間を要する農地など地域資源の管理をもままならない状況に追い込んでいる。乱暴な言い方ではあるが、これは食料の「作り手」と「繋ぎ手」「食べ手」が「顔の見えない関係」となった帰結であり、戦後の農業の近代化と農業政策および経済発展に伴う生活様式の変化に起因する。これらの問題をどのように解決していくのがよいのか、消費者主権のもとでの行動変更の難しさと食農教育のあり方を通して考えてみたい。

